



「家庭よ 汝は 道徳上の学校である」

ヨハン ハイน์リッヒ ペスタロッチ

ペスタロッチは、スイスで生まれた教育学者で「教育の父」と呼ばれている有名な人です。この言葉は、家庭での教育や躾が子どもにとっていかに大切かを語っています。家庭での教育や躾は難しいものですが、優しくしても厳しくしても、そこに愛情があれば子どもに伝わります。子どもの言動で気になることがあれば、思いきって伝えること、叱ることも必要です。何も言わないことが一番いけないことなのです。



## 家庭でできる道徳教育

小学校は、昨年度から「道徳」を特別の教科として実施しており、中学校では今年度から実施します。このように学校現場において、道徳教育を充実させ、子どもたちに「生きる力」や「豊かな心」を育むための取組がされているところです。

しかし、学校だけに道徳教育を任せてもよいのでしょうか。家庭は子どもたちが生活していく上での基盤です。ペスタロッチが言っているように、家庭でこそ道徳教育をする場ではないのでしょうか。できれば、小学校入学前の乳幼児期等の早い時期から行うのがよいと思います。

小学校の1年及び2年生で「家族愛、家庭生活の充実」という内容を扱います。そこでは、“父母・祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ（小学校学習指導要領）”子どもの育成を目指しています。この内容を家庭で行うとするとどのようにすればよいのでしょうか、考えてみましょう。

子どもが“父母・祖父母を敬愛する”ようになるには、お父さんやお母さんが、おじいちゃんおばあちゃんを大切に作る姿を見せること、そしてお父さん、お母さんがお互いを認め合い、仲の良い姿を見せることでしょう。愛情が一杯の家庭で育てることが大切です。そうすれば、子どもは、父母・祖父母を敬愛するようになるのだと思います。

次に“進んでお手伝いなどをして、家族の役に立つ”子どもに育てるにはどのようにしたらよいのでしょうか。子どもは、2歳くらいになると簡単なお手伝いができるようになります。お父さんやお母さんのために、ポストから新聞を取って来たり、テーブルの茶碗を炊事場に運ぶこともできます。赤ちゃんが泣いていたら、知らせることもできます。このように小さな時からできる手伝いもあります。そして、大きくなればできることも増えてきます。子どもの成長の過程で、どんどん手伝ってもらうようにしましょう。そして、大切なことは手伝いをしてくれた時に、「手伝ってくれてありがとう。あなたのおかげで助かったわ」と感謝の声をかけることです。この言葉により、子どもは役立つことに喜びを感じ、また、やろうという気持ちになります。物を与えるよりも、感謝の言葉がけが一番のご褒美です。元来、人間の中には人の役に立つことに喜びを感じる種があるのだと思います。この種に小さいうちから水をかけてやるのが大切です。そうすれば、人の役に立つことを積極的に行う子どもに育つことなのでしょう。

学校での指導内容には、このような「家族愛」だけでなく、「正直、誠実」「親切、思いやり」「感謝」「礼儀」等、多くのものがあります。これらのことも家庭においてでもできます。別に読み物資料は無くてもよいのです。

子どもに道徳性を身につけさせるためには、成長にあった体験をさせ、あせることなくじっくりと温かく見守り、子どもの中に**自己肯定感**を育むことが大切です。